

- 問題行動が多い 1 2 3 4 5
- 仕事が増えた 1 2 3 4 5
- 注目すべき点が多い 1 2 3 4 5
- 記録する時間が無い 1 2 3 4 5
- 記録の負担感 1 2 3 4 5
- 同僚に記録をお願いしにくい 1 2 3 4 5
- 自由記入欄

3. ストラテジーシートを作成する上で,あなたが感じたこととして当てはまる数字に○をつけてください.また,可能でしたら下の空白部分に,特に難しいと感じた箇所と理由を記入してください.

- | | とても難しかった | とてもわかりやすかった |
|---------------|---|-------------|
| □事前 | 1 2 3 4 5 | |
| □行動 | 1 2 3 4 5 | |
| □結果 | 1 2 3 4 5 | |
| □事前の工夫 | 1 2 3 4 5 | |
| □望ましい行動 | 1 2 3 4 5 | |
| □強化の手立て | 1 2 3 4 5 | |
| □起こってしまった時の対応 | 1 2 3 4 5 | |

自由記入欄

4. ストラテジーシートを現場で共有できましたか?当てはまる数字にチェックを入れてください.

- | できなかった | できた |
|---|-----|
| 1 2 3 4 5 | |

5. 現場で実際にストラテジーシートを実行した時、ストラテジーシートを見直す必要があると感じましたか?

あまり感じなかった 強く感じた
1 2 3 4 5

6. サイボウズを利用して、感想として当てはまる数字に○をしてください。また、利用していないもの場合は、数字に○をつけず、右端の□にチェックを入れてください。もし、下記の項目にサイボウズを利用する上で難しいが無かった場合、お手数ですが自由記入欄に記入してください。

	難しかった	簡単だった	未使用
①ログイン	1 2 3 4 5		☐
②東社協へのアクセス	1 2 3 4 5		☐
③チャットの利用	1 2 3 4 5		☐
④掲示板の利用	1 2 3 4 5		☐
⑤ファイルのアップロード	1 2 3 4 5		☐

自由記入欄()

7. パソコンやスマートフォン等の利用について、あなたに当てはまる数字を○してください。

	全く利用しない	毎日使用する
☐ ワードやエクセルの使用頻度	1 2 3 4 5	
②インターネットの使用頻度	1 2 3 4 5	
③メール/チャットの送受信頻度	1 2 3 4 5	

8. 本研修で公開した「WEB 版行動観察シート」を利用していただけましたか?

☐はい ☐いいえ

8 の項目で「はい」にチェックした方は 3 ページ目を記入してください。
「いいえ」にチェックした方は 4 ページ目を記入してください。

このページは 6 の項目で「はい」にチェックを入れた方のみ記入してください。

1. 行動観察記録をつける際の記録方法で、当てはまるもの 1 つにチェックを記入してください。

- ☐メモに行動を記入した後,WEB 版行動観察シートに記録
- ☐行動観察後,すぐにスマホ等の端末から WEB 版行動観察シートに記録
- ☐問題行動が起こった時間と環境,行動の内容を覚えておき,後で WEB 版行動観察シートに記録

2. WEB 版行動観察シートを利用して,当てはまる数字に○を付けてください.また,改善点があれば下の空白部分に記入してください.

	悪い	良い
☐ 直感的に操作できる	1 . . . 2 . . . 3 . . . 4 . . . 5	
☐ 記録のしやすさ	1 . . . 2 . . . 3 . . . 4 . . . 5	
☐ 記録の見やすさ	1 . . . 2 . . . 3 . . . 4 . . . 5	

3. WEB 版行動観察シートを利用する際使用した端末で当てはまるものに全てチェックを入れてください.

- ☐パソコン ☐スマートフォン ☐タブレット
- ☐その他()

4. WEB 版行動観察シートで問題行動を記録する際にかかった実際の時間をおおまかにお答えください.(例:約 1 分/1~4 分)

5. 以下の項目から,追加したら良いと思う機能を選んでください.(複数回答可)

- ☐グラフ化 ☐専門家からのフィードバック ☐音声入力 ☐動画添付
- ☐強度行動障害に関する情報サイト ☐その他
- ()

6. サイボウズと WEB 版行動観察シートとの相性は良かったと思いますか?当てはまる数字に○をつけ,その理由を下の自由記入欄にお書きください.

悪かった

良かった

1 2 3 4 5

自由記入欄()

7. WEB 版行動観察シートを利用した人は誰ですか?当てはまるものにチェックを入れてください.
- ☐自分のみ ☐自分と他の職員 ☐PC 技能の高い職員
- ☐その他()
8. 打ち出された行動観察シートはどのように職場で共有されましたか?当てはまるものにチェックを入れてください.
- ☐印刷して共有 ☐WEB 版行動観察シートで共有 ☐データ化(画像データ等)して共有
- ☐共有してない
9. 研修の感想/要望等ございましたらご自由にご記入ください.

このページは6の項目で「いいえ」にチェックを入れた方のみ記入してください.

1. 1度でも WEB 版行動観察シートのサイトにアクセスしましたか?また,下の自由記入欄に,結果的に WEB 版行動観察シートを利用しなかった理由を記入してください.

☐はい ☐いいえ

自由記入欄

2. WEB 版行動観察シートを利用しなかった理由を下の項目から選んでください。(複数回答可)

☐パソコンやスマートフォンに慣れていない ☐勉強しなければいけない事が増える

☐プライバシーの保護が心配 ☐使い方がわからなかった ☐アクセスできなかった

☐入力が面倒 ☐職場で許可が出ない/許可が必要 ☐職場にパソコン等の端末がない

☐その他

--

3. どのような機能が追加されたら,WEB 版行動観察シートを利用してみようかと思いませんか?以下の項目の中から選んでください。(複数回答可)

☐グラフ化 ☐専門家からのフィードバック ☐音声入力 ☐動画添付

☐強度行動障害に関する情報サイト

☐その他

--

4. 問題行動を記録する際にかかった実際の時間をおおまかにお答えください。(例:約 1 分/1~4 分)

5. もし,守秘義務の関係で WEB 版行動観察シートが利用できなかった場合,どのような点において守秘義務に引っかかったのかを記入してください.

6. 研修の感想/要望等ございましたらご自由にご記入ください.

分担研究報告書

保護者を管理者とした ICT による情報共有の可能性 — Facebook を利用した事例の検討—

研究協力者 中谷啓太（鳥取大学医学系研究科臨床心理学専攻）
主任研究者 井上雅彦（鳥取大学医学系研究科）

研究要旨

医療・福祉・教育・家族の連携ネットワークの重要性が指摘され、ICT 活用の必要性がいわれているが、情報管理の側面からは、特定機関が個人情報管理することへの課題がある。本研究では、強度行動障害と重度の知的障害を有する児童の保護者と福祉・教育機関による支援会議を継続し、保護者が SNS を利用して支援情報を管理発信している事例について面接を実施し、保護者主体ですすめる連携システムの利点と課題について考察した。

A. はじめに

医療・福祉・教育・家族の連携ネットワークの重要性が指摘され、ICT 活用の必要性が叫ばれている。しかしながら、我が国における発達障害をもつ保護者と教師、門家・関係機関の連携を目的とした ICT 研究は乏しく、幼稚園児を対象とした井上(2008)のインターネット上の掲示板を利用したものや、松河・今井(2002)の「I アルバム」などその数は限られている。

個人情報の管理という側面からは、特定機関がそれを管理することに対して多くの課題がある。本研究では、強度行動障害と重度の知的障害を有する児童の保護者と福祉・教育機関による支援会議を継続し、保護者が SNS を利用して支援情報を管理発信している事例について面接を実施し、保護者主体ですすめる連携システムの利点と課題について考察する。

B. 方法

強度行動障害と重度知的障害を持つ小学生の母親。子どもの特性や療育情報について SNS(Facebook)を利用して、大学スタッフ、担任教師、利用する複数のデイサービス機関に情報

を発信していた。本研究は母親、教師、複数の福祉支援機関のスタッフ 4 名、筆者の計 7 名で非構造化面接を行い、母親の発信する SNS 情報の利用状況と感想、望ましい情報共有の方法などについて聴取した。

C. 結果

母親が使用している SNS は Facebook で、投稿する内容は、子どもの療育課題や休日の過ごし方、リラックスできるもの等、母親から見た子どもの日常や工夫がメインであった。情報の公開範囲は支援機関や専門家だけに絞られており、学校の担任以外の複数の福祉サービス機関の担当者は Facebook 上で情報共有ができていたとのことであった。学校の担任との情報共有は連絡帳や実際に会って話すなどの方法を用いており、学校と支援機関の間の情報共有はほとんど行われていない状態であった。

Facebook での記事の投稿に対する各機関からのフィードバックは、「いいね」がほとんどであった。また、母親自身は投稿された内容について各支援機関のスタッフと話をするとのことであった。

母親は Facebook の利点として、気軽に動画や画像をアップロードでき、情報を伝えやすいことを語り、各支援機関のスタッフも「日頃見ることのできない子どもの一面を知ること、新しい関わり方を模索できるのが良い」と述べていた。また、支援機関も Facebook の動画や画像等の情報共有によって機関として新しい関わり方の模索に繋がる可能性があることが語られた。

しかし一方 Facebook だと気軽にコメントすることが難しく、双方向性のコミュニケーションに繋がりにくいという意見もあげられた。他の SNS として LINE であれば、双方向にコミュニケーションを取りやすいことが一人の支援機関のスタッフからあげられたが、学校の担任からは Facebook も LINE も教員が個人として保護者との情報共有を進めていくことが困難であることが語られた。

著者より、Facebook や LINE の様なツールとして、サイボウズ等の企業向けのグループウェアが存在することを提案すると、学校の担任は、グループウェアならば、学校のアドレスを用いて、学校からアクセスすることで情報共有に参加できるかもしれないと述べていた。また、前例があれば学校としては参加しやすくなることが語られた。

D. 考察

個人情報の共有を ICT を利用して行う場合、個人情報の保護は、支援機関側の最も配慮すべき点といえる。その管理については厳重なシステムを必要とし、かつ管理コストも発生することから自治体などで実施しているところは限られている。

事例の聞き取りから、Facebook を用いることで、親自身が子どもの個人情報の管理を行うことが可能になり、動画や画像等での情報共有が複数の機関と可能になることが示された。また親が子どもの情報をすべての人に公開するわけではなく、特定の支援者を選択して招待し、共有することも特徴である。これは従来行われてきた連絡帳などの情報共有には無い、ICT のメリットである。

しかしながら、情報の双方向性という観点からは、支援機関の側からのフィードバックや情報発信、つまり Facebook に担当スタッフが書き

込みをすることに対しては、組織的な抵抗感があることが明らかになった。これは生徒-教師間における SNS 禁止の例のように、保護者と教師・支援者間とはいえ、何らかのトラブルの発生がないとはいえず、組織が管理上の問題を問われかねないためであろう。

対応策としては、本事例で母親が行っていたように、支援者側からの情報発信はオフライン上で行い、読んだメッセージに対しては「いいね」などの送信にとどめること、支援者側からは個人のアドレスではなく、学校や施設のメールアドレスを用い、施設や学校のパソコンから勤務時間内にアクセスすることなどが考えられる。

親が子どもの個人情報管理し関連機関で情報を共有することから、情報を発信しあうことに発展させるためには、今後のルール作りも含めたソフト的な運用議論を深めていく必要がある。

E. 文献

井上雅彦：「インターネットを利用した連携システム」鳥取大学心理臨床研究，第1巻, 3-7, 2008 松河秀哉, 今井亜湖：「インターネットを用いた幼稚園と家族の連携システムの開発と評価」日本教育工学論文誌, 26(1), 45-53, 2002

F. 健康危険情報

該当なし

G. 研究発表

特に無し

H. 知的財産権の出願・登録状況

特許取得

特に無し

実用新案登録

特に無し

その他

特に無し

「医療・教育・福祉の連携による行動障害のある児・者への支援方法に関する研究」に関わる会議報告（2016/3/20）を受けて

本研究所の教育相談では、他害行動やものへの執着のある高次脳機能障害児〔2014 年度は小学校特学在籍（岡本，2016）、2015 年度は中学校特学在籍〕のコンサルテーションを行ってきた。対象児は放課後には福祉施設を利用し、今年度は中学進学ということがあり、小学校特学担任が関係者による連携の必要性を感じ、昨年度（2014 年度）より継続的に教育と福祉の連携会議を行ってきている。連携会議では、学校における FA に基づく指導結果の報告及び福祉施設での対象児の様子報告であった。

今回の会議報告を受けて、教師と福祉施設職員がストラテジーシートに基づく記録の報告などを行うことで、より連携会議の質も高まっていくと感じた。それと同時に、連携がありきではなく、何のために連携を行うかといった目的が明確になっていることが必要であると感じた。以下、本研究と関連する事項で、今後、必要と考えられる 2 点を述べる。

1. 日常的な PDCA サイクルに基づく研修と継続的なコンサルテーションの必要性

教師は PDCA サイクルによる指導・支援が求められるが、実際には、十分な指導計画が立てられず、また、振り返りを行わずに実践が先行する場合がある。特に、1 人担任の場合はこうしたことが起こりやすい。したがって、PDCA サイクルに基づく指導・支援を強化する継続的なコンサルテーションの役割は大きいと考える。福祉施設職員を対象にした WS（井上，2015；pp25-36）では、その研修効果が示されていた。研修受講者が対象児への PDCA に基づく指導・支援を行うと共に、専門家から助言を継続的に受けていくことにより、研修受講者による行動障害への適切な指導・支援が可能になると考えられる。さらに、行動障害への理解を深めた受講者が、校内研修や学部会などを通して、周囲の教師にいかに関与させるかが次の課題と考える。

以上から、教師による行動障害への適切な指導・支援を充実させるために、特別な研修の場から校内研修や学部会といった日常的な研修の場に移行させることや、専門家による継続的なコンサルテーションの機会が重要であると考えられる。

2. 教師と保護者の連携を充実させる仕組の必要性

教師は、上記に示す研修を受講して行動障害の指導・支援に対する専門性を向上させるだけでなく、保護者との連携を充実させることが重要であると考えられる。本研究では、医療・教育・福祉の連携の充実であって、家庭は直接の標的とされていないかも知れない。会議では、「学校では問題が起これなくても、家庭ではとても困っているケースがある」という指摘があったが、反対のケースもありうるだろう。教師と保護者は学校と家庭での情報共有を行い、両方の場面での行動障害への適切な指導・支援が求められる。研修に関する先行研究では、保護者支援を踏まえた研修はほとんど見られないが、インクルーシブ教育システム構築に向けて、今後、保護者との連携は今まで以上に必要とされることが考えられる。今後は、上述した研修に、保護者支援の側面を踏まえた内容を加えていくことが必要と考える。

岡本邦広（国立特別支援教育総合研究所）

研究成果の刊行に関する一覧表

書籍

著者氏名	論文タイトル名	書籍全体の編集者名	書 籍 名	出版社名	出版地	出版年	ページ
井上雅彦	自閉症の子どものためのABA基本プログラム	井上雅彦	家庭で無理なく対応できる困った行動Q&A	学研	東京	2015	8-188
井上雅彦	私たちの行動のわけー行動の生じる理由と対応を知る	牛谷正人 片桐公彦 肥後祥治 福島龍三郎	行動障害のある人の「暮らし」を支える	中央法規	東京	2015	84-101
井上雅彦	知ることから始めようー根拠を持って支援する	牛谷正人 片桐公彦 肥後祥治 福島龍三郎	行動障害のある人の「暮らし」を支える	中央法規	東京	2015	66-81
市川宏伸	発達障害を理解しようー発達障害とはなんだろう		発達障害支援ハンドブック	東京都福祉保健局	東京	2015	6-7
市川宏伸	診断名参照表		発達障害支援ハンドブック	東京都福祉保健局	東京	2015	8
市川宏伸	発達障害を理解しようー薬物療法		発達障害支援ハンドブック	東京都福祉保健局	東京	2015	21
市川宏伸	発達障害を理解しようー発達障害と依存症		発達障害支援ハンドブック	東京都福祉保健局	東京	2015	24
市川宏伸	発達障害を理解しようーライフステージを通じた支援の必要性		発達障害支援ハンドブック	東京都福祉保健局	東京	2015	25-26
市川宏伸	臨床評価法総論ー行動障害・自閉症・子どもの発達障害	山内俊雄 鹿島晴雄	精神・心理機能評価ハンドブック	中山書店	東京	2015	19-20
市川宏伸	精神・行動随伴症ー注意欠陥・多動性障害および広汎性発達障害臨床てんかん学	樋口輝彦 市川宏伸 神庭重信 朝田隆 中込和幸	今日の精神疾患治療指針	医学書院	東京	2015	11

雑誌

発表者氏名	論文タイトル名	発表誌名	巻号	ページ	出版年
井上雅彦	自閉症スペクトラムにおける感覚異常に関する行動評価と機能分析アプローチ	発達障害研究	37(4)	324-333	2015
原口英之 加藤香 井上雅彦	発達障害のある子どものきょうだい間のトラブルに対するペアレント・トレーニングの効果	小児の精神と神経	55(2)	129-142	2015
Matsuo, R, Inoue, M, Maegaki, Y	A Comparative Evaluation of Parent Training for Parents of Adolescents with Developmental Disorders	Yonago Acta medica	58(3)	109	2015
宮崎美江 宮崎光明 井上雅彦	発達障害のある子どものきょうだい間のトラブルに対するペアレント・トレーニングの効果	小児の精神と神経	55(2)	129-142	2015
Inada N, Ito H, Yasunaga K, Kuroda M, Iwanaga R, Hagiwara T, Tani I, Yukihiro R, Uchiyama T, Ogasahara K, Hara K, Inoue, M, Murakami T, Someki F, Nakamura K, Sugiyama T, Uchida H, Ichikawa H, Kawakubo Y, Kano Y, Tsujii M	Psychometric properties of the Repetitive Behavior Scale-Revised for individuals with autism spectrum disorder in Japan	Research in Autism Spectrum Disorder	15	60-68	2015

発表者氏名	論文タイトル名	発表誌名	巻号	ページ	出版年
谷伊織 伊藤大幸 平島太郎 岩永竜一郎 萩原拓 行廣隆次 内山登紀夫 小笠原恵 黒田美保 稲田尚子 原幸一 井上雅彦 村上隆 染木史緒 中村和彦 杉山登志郎 内田裕之 市川宏伸 辻井正次	日本版短縮感覚プロフィールの標準化：標準値および信頼性・妥当性の検討	精神医学	57(6)	419-429	2015
原口英之 井上雅彦 山口穂菜美 神尾陽子	発達障害のある子どもをもつ親に対するピアサポート；わが国におけるペアレント・メンターによる親支援活動の現状と今後の課題	精神保健研究	61	49-56	2015
平本厚美 井上雅彦 高貝蹴	レット症候群における合目的的な手の使用の形成	子どものこころと脳の発達	6(1)	42-47	2015
井上雅彦	行動論的アプローチはASD治療の到達点として何をを目指すのか	精神療法	41(4)	98-504	2015
井上雅彦	発達障害と家族支援	精神療法	41(4)	577-584	2015
鳥居深雪 河崎佳子 海津亜希子 佐藤克敏 鳥越隆士 井上雅彦	特別支援教育の展望：インクルーシブ教育の目指すべきもの－ユニバーサルデザインと専門性	教育心理学年報	54	173-180	2015
式部陽子 岩坂英巳 井上雅彦	高等学校定時制課程における行動面・学習面で「気になる」生徒の支援に関する教員へのコンサルテーション効果の検討	次世代教員養成センター研究紀要	1	75-81	2015
東野正幸 川村尚 井上雅彦	強度行動障害のある人の支援を目的とした行動測定支援アプリケーションと情報共有支援システムの検討	電子情報通信学会技術研究報告	114(497)	41-43	2015
井上雅彦	応用行動分析を用いた発達障害の子どもへの支援	精神療法	41(2)	185-189	2015
市川宏伸	子どもの薬物療法～医療現場での苦悩 わが国の現状	公益社団法人日本精神神経科診療所協会	41(2)	87-99	2015

発表者氏名	論文タイトル名	発表誌名	巻号	ページ	出版年
市川宏伸	個を重んじた教育について －児童青年精神科から見た特別支援教育－	特別支援教育の 実践情報	166	4-5	2015
市川宏伸	大人の発達障害 医学概論・総論	心の健康だより	114	2-3	2015
小枝達也	発達性読み書き障害 (dyslexia) 診断と治療の進歩：医療からのア プローチ 今後の研究と診療の展 望	脳と発達	47	7-11	2015
Pu S, Nakagome K, Yamada T, Yokoyama K, Matsumura H, Nagata I, <u>Kaneko K</u>	Prefrontal activation predicts social functioning improvement after initial treatment in late- onset depression	Journal of Psychiatry Research	62	62-70	2015
Yokoyama K, Yamada T, Mitani H, Yamada S, Pu S, Yamanashi T, Matsumura H, Nakagome K, <u>Kaneko K</u>	Relationship between hypothalamic-pituitary-adrenal axis dysregulation and insulin resistance in elderly patients with depression	Psychiatry Research	226	494-498	2015
Hagiya K, Sumiyoshi T, Kanie A, Pu S, <u>Kaneko K</u> , Mogami T, Ohshima S, Niwa S, Inagaki A, Ikebuchi E, Kikuchi A, Yamasaki S, Iwata K, Nakagome K.	Facial expression perception correlates with verbal working memory function in schizophrenia	Psychiatry and Clinical Neurosciences	69	773-781	2015

発表者氏名	論文タイトル名	発表誌名	巻号	ページ	出版年
Pu S, Nakagome K, Yamada T, Yokoyama K, Matsumura H, Yamada S, Sugie T, Miura A, Mitani H, Iwata M, Nagata I, <u>Kaneko K</u>	Suicidal ideation is associated with reduced prefrontal activation during a verbal fluency task in patients with major depressive disorder	Journal of Affective Disorder	181	9-17	2015
Pu S, Nakagome K, Yamada T, Matsumura H, Yokoyama K, <u>Kaneko K</u> , Kurosawa Y	Association between Fish Consumption and Prefrontal Function during a Cognitive Task in Male Japanese Workers:A Multi-Channel Near-Infrared Spectroscopy Study	PloS One	10(4)		2015
Masai M, Pu S, Yokoyama K, Matsumura H, Yamanashi T, Itakura M, Sugie T, Miura A, Nagata I, Iwata M, <u>Kaneko K</u>	Residual symptoms were differentially associated with brain function in remitted patients with major depressive disorders	Yonago Acta medica			2015
<u>兼子幸一</u>	統合失調症の社会機能障害	精神科治療学	30	45-50	2015
<u>兼子幸一</u>	衝動制御障害の考え方と対応への取り組み	アディクションと家族	31	8-14	2015
<u>兼子幸一</u>	統合失調症に対する認知リハビリテーション	精神科治療学	30	817-822	2015
<u>兼子幸一</u>	統合失調症の認知機能障害の神経生物学的背景	精神医学	57	743-752	2015
Kozo Tanigawa, Miki Tsuji, Kenichi Takahashi, <u>Takao Kawamura</u> , Kazunori Sugahara	Automatic Human Tracking System using Localized Neighbor Node Calculation	Sensors & Transducers	194(11)	54-61	2015

発表者氏名	論文タイトル名	発表誌名	巻号	ページ	出版年
Miki Tsuji, Tappei Yotsumoto, Kenichi Takahashi, Kozo Tanigawa, <u>Takao Kawamura</u> , Kazunori Sugahara	Reduction of Neighbor Node Calculations for Automatic Human Tracking System	The Ninth International Conference on Emerging Security Information, Systems and Technologies		154-159	2015
Tappei Yotsumoto, Kozo Tanigawa, Miki Tsuji, Kenichi Takahashi, <u>Takao Kawamura</u> , Kazunori Sugahara	Automatic Human Tracking System using Localization of Neighbor Node Calculation	The Ninth International Conference on Emerging Security Information, Systems and Technologies		139-145	2015
Shin Osaki, Masayuki Higashino, Kenichi Takahashi, <u>Takao Kawamura</u> , Kazunori Sugahara	A Framework to Mitigate Debugging Difficulty on Agent Migration	Proceedings of the 7th International Conference on Agents and Artificial Intelligence		190-197	2015
<u>會田千重</u> 谷口謙 石井清久	特集/重症心身障害1－総論、診察、栄養管理、神経系/神経系の合併障害の治療・管理/行動障害、睡眠障害への対応	小児内科	47(11)	1965-1969	2015
<u>會田千重</u> 中山政弘 平野誠 黒木俊秀	行動障害を有する重度・最重度精神遅滞児(者)に対する向精神薬の使用状況－国立病院機構7施設の「動く重症心身障害病棟」における実態調査と病棟担当医による意識調査	児童青年精神医学とその近接領域	56(1)	114-129	2015
大村美保 相馬大祐 <u>五味洋一</u> 信原和典 志賀利一	障がい者 福祉サービスによる矯正施設対処者の受入れ・支援に関する研究1－全国の障害者支援施設及び5自治体の障害福祉サービス事業の全数調査より	国立のぞみの園研究紀要	8	99-112	2015
志賀利一 <u>五味洋一</u> 信原和典	強度行動障害支援者養成研修に関する研究－実践研修のプログラム及びテキストの開発・普及について	国立のぞみの園研究紀要	8	81-98	2015
志賀利一 相馬大祐 信原和典 大村美保 <u>五味洋一</u>	障がい者福祉施設従事者等の虐待防止と対応	国立のぞみの園研究紀要	8	58-80	2015

発表者氏名	論文タイトル名	発表誌名	巻号	ページ	出版年
大村美保 志賀利一 信原和典 五味洋一 相馬大祐	養護者による障害者虐待事案の分離保護に関する研究－分離保護実績のある5自治体の聞き取り調査より	国立のぞみの園 研究紀要	8	51-57	2015
五味洋一 村岡美幸 志賀利一 大村美保 相馬大祐 信原和典	相談機関における障害者虐待の認知状況（その2）－地域の相談機関における虐待事例の分析	国立のぞみの園 研究紀要	8	35-50	2015
五味洋一 志賀利一 大村美保 相馬大祐	相談機関における障害者虐待の認知状況（その1）－平成25～26年度往復はがき調査結果の比較を中心に	国立のぞみの園 研究紀要	8	30-34	2015
信原和典 志賀利一 相馬大輔 大村美保 五味洋一	壮年期及び高齢期の発達障害者の実態に関する基礎的研究 国立のぞみの園研究紀要2015	国立のぞみの園 研究紀要	8	1-7	2015
稲田尚子	海外の取り組みから支援を考える：毎日の生活の中で対人コミュニケーションスキルを身につける本人のモチベーションの利用	Asp heart:広汎性発達障害の明日のために	14	80-82	2015
東野正幸 灘本拓 高橋健一 川村尚生 菅原一孔	モバイルエージェントシステムのデバッグに関する研究の展望：合同エージェント			185-186	2015
灘本拓 高橋健一 東野正幸 川村尚生 菅原一孔	モバイルエージェントシステムのためのエージェント検索機能の提案：合同エージェント			187-188	215
Shin Osaki, Masayuki Higashino, Kenichi Takahashi, Takao Kawamura, Kazunori Sugahara	A Framework to Mitigate Debugging Difficulty on Agent Migration	Proceedings of the 7th International Conference on Agents and Artificial Intelligence		190-197	2015
東野正幸 川村尚生 井上雅彦	強度行動障害のある人の支援を目的とした行動測定支援アプリケーションと情報共有支援システムの検討	電子情報通信学会技術研究報告	114(497)	41-43	2015

